

Stent placement outcomes for central venous occlusion in dialysis patients

P-13

Naoki Serikawa, Hisao Otsuki, Takanori Kawamoto, Masafumi Yoshikawa, Eiji Shibahashi, Yusuke Inagaki, Masashi Nakao, Jyunichi Yamaguchi
Toyko Women's Medical University Hospital

【背景】透析患者において、症候性中心静脈病変(CVD)はシャント機能不全の原因となり得る重要な合併症である。通常、バルーン血管形成術(PTA)が第一選択とされるが、急速な再狭窄や弾性反跳に対してはステント留置が考慮される。近年のステントデバイスを用いた CVD に対する治療成績については十分に明らかではない。【目的】本研究では、近年のデバイスを用いたステント留置による CVD に対する血管内治療(EVT)の安全性および有効性を明らかにすることを目的とした。【方法】2012 年 5 月から 2023 年 8 月に当院で治療を受けた、バルーン拡張後の急性リコイルまたは 3 か月以内の再狭窄に対してステントを留置された連続 58 例を後方視的に解析した。主要評価項目は標的病変の再血行再建(TLR)回避率、副次評価項目は標的ステントの永続的閉塞の回避率とした。【結果】平均年齢は 65.3 ± 11.2 歳で、中央値の追跡期間は 581 日(四分位範囲:362~1053 日)であった。全例において合併症なくステント留置が成功した。1 年後の一次開存率は 62.3%(36/58 例)、二次開存率は 98.3%(57/58 例)であった。Kaplan-Meier 解析では、一次開存率は 1 年後で 62.3%、2 年後で 61.7%、二次開存率は 2 年後で 98.3%であった。【結論】標準的なバルーン血管形成術に抵抗性を示す CVD に対するステント留置は、安全かつ良好な長期開存率を示し、現代の臨床実践において有効な治療選択肢となり得る。